

聖書:使徒の働き15章22～41節

説教:どんな重荷も負わせない

はじめに

クリスチャンになるのに国籍や言語の違いに何の差別もないことを私たちは知っています。ところが二千年前は違いました。救われるのはユダヤ人だけだと使徒たちも含めて全員が思っていました。ところが、異邦人にも聖霊が降り、救われるということが目の前で起きていく。それで初めて、神はユダヤ人ばかりではない、異邦人も救おうとされているということがわかっていきました。

そこから新たな問題が生まれてきます。創世記には、神との契約のしるしとして男子は生まれて八日目に割礼を受けるようにと書いてあります。ユダヤ人はこれを守ってきた。ところが異邦人はどうか。救われたと言っているのに割礼は受けていない。これはおかしい。異邦人もきちんと割礼を受けさせるべきだ。こう言い出す人たちが出て来ました。この問題が起きたとき、パウロとバルナバはアンティオキアという町にいたのですが、これは自分たちだけで結論を出すわけにはいかない。エルサレムに行って、使徒たちにも考えてもらった方がよいということになり、彼らはエルサレムに向かい会議を開くことにしました。いろいろな議論が出ましたが、聖書のみことばを開いたとき、異邦人の救いのことも神はきちんと預言しておられる。だから異邦人には割礼を受けさせる必要はないという結論に至ります。これが前回までのあらすじです。

1 エルサレム教会の配慮

1) 混乱している教会のために

異邦人割礼問題については、ひとまず結論が出ました。さあ、この後どうするか。みなさんほどのように処理をするでしょうか。アンティオキア教会では、異邦人にも割礼を受けさせるべきだと主張する人たちと、異邦人には割礼を受けさせる必要はないと考える人たちがいて真っ二つに分かれています。そこへパウロとバルナバがエルサレムから戻り、そのまま手紙を渡したとします。それにはこう書いてある。28節。「聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。」これを読んで、割礼反対派は喜ぶでしょう。でも割礼賛成派はどうなりますか。おもしろくありません。このままでは、とても和解することはできな

い。感情のしこりが残るでしょう。最悪の場合は分裂してしまう可能性があります。

2) 二つの配慮

エルサレム教会は、そのことを考えました。それで二つの配慮をすることにしました。一つ目は、エルサレム教会で指導的に立場にあったユダとシラスという二人の兄弟を送ることにした。この二人から直接説明してもらえば、エルサレムで公平な議論がおこなわれたのだと理解してくれるだろうと考えたわけです。それが一つ目です。

二つ目。そのことは25、26節にあります。「そこで私たちは人を選び、私たちの愛するバルナバとパウロと一緒に、あなたがたのところにおくることを、全会一致で決めました。私たちの主イエス・キリストの名のために、命を献げている、バルナバとパウロと一緒にです。」

割礼賛成派は、どうしてもバルナバ、パウロに対して複雑な感情を持つだろう。そこでエルサレム教会は言うわけです。この二人は忠実な働き人なのだから是非、信頼してください。そのようお願いをしました。

3) 互いに助け合う教会

ここから私たちはいくつかのことを教えられます。教会は聖霊とイエス・キリストによって建てられていきます。しかし一方罪人の集まりでもありますから、いろいろな問題も起きます。教会の中で解決できることもありますが、ときには教会の中で解決できないほど大きな問題にぶつかることもあります。そんなときどうするか。アンティオキア教会はエルサレムの教会に助けを求めました。要請を受けたエルサレムの教会も慎重でした。「自分たちは偉いものだから、あなたがたは従いなさい」というような高飛車な態度はとらない。いろいろな配慮をしながらアンティオキア教会が分裂しないで、和解できるよう最大限の配慮をしていきました。その配慮の細やかさを見ると、彼らがどのような信仰をもっていたのかをうかがい知ることができます。

2 パウロの第二次伝道旅行

1) 同じ問題が起きるだろう

さて、ここで割礼問題の話が終わるのですが、また新たな問題が起きてしまいました。その発端が36節です。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたいすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また言って見てこようではありませんか。」パウロは、第一回目の伝道旅行で訪問した町のことが気にかかっていたようです。何が気にかかっていたのかは書かれていませんが、いくつか推測ができます。パウロの伝道によって救われる人たちが起こされ教会が建てられました。しっかりした人を選んで長老とし、教会の働きを委ねてきました。でも関われる時間は非常に限られていましたので十分にフォローができないまま町を去らなければならなかった。それで今どうなっているか心配になった。それはあるでしょう。

でももう一つあった。やはり異邦人の救いの問題です。アンティオキアでこの問題が起きたということは、必ず自分たちが開拓した教会でも同じことが起きるだろう。一刻も早く、エルサレム教会が出した結論を伝えて、彼らが落ち着いて信仰生活が守れるようにしなければ。そういうこともあったと考えられます。

2) マルコと呼ばれるヨハネ

パウロから相談を受けたバルナバは、「それはよい考えです」と同意してから、ではマルコと呼ばれるヨハネも連れて行きましょうと提案をします。ところがパウロはこれを聞いて大反対をします。理由は38節にある。「しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かない方がよいと考えた。」このことは確かに13章13節にあります。「パウロの一行は、パロスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。」なぜマルコと呼ばれるヨハネがひとりだけ帰ってしまったのかはわかりません。一説によれば、この先向かう町ではユダヤ人たちの強硬な反対に遭うことがわかり、それが恐くなったのではないかと考える研究者もいます。いずれにしてもパウロは、ヨハネが一度あのような行動したことで一緒に働くことが難しいと考えていたようです。

3) 別行動をとることにした

ところがなぜかバルナバはヨハネのことを諦めず、一緒に連れて行きたいと主張し、二人は激しい議論になり、とうとう別行動を取ることになりました。皆さんどう思いますか。さきほどは、アンティ

オキア教会が困っていたときエルサレム教会が手を差し伸べて励まし合った。非常に麗しい姿を見た。ところが今何をしているか。早い話、「けんか別れ」のような形になった。教会の中でこんなことが起きていいのか、疑問に思われる方もいるでしょう。もちろん起きてほしくはありません。でも聖書は正直です。包み隠さず、教会の中で起きたことをそのまま書いています。どうして書くのでしょうか。普通なら恥ずかしい話です。でも、教会はほんなどころだと言いましたから、人が建てたものではない。聖霊と主イエス・キリストが建ててくださっているのが教会です。そこへ罪人が集まるのですから、意見の対立は時には起こる。パウロとバルナバがどんなにすばらしい信仰者であったとしても、時にはけんか別れのようなことも起きることを否定しません。

ここを読んで、世の人たちはなんと言うでしょう。「なんだ。イエス・キリストの教会とか神の教会とか言っているけれど、中でやっていることは会社や他の組織と全然変わらないではないか。」

でも私たちはそうは考えない。どんなに問題が起きたとしても、主の教会であることにこだわります。なぜこだわるのか。きちんとした理由があります。次にそれを見ましょう。

3 神のご計画

1) シラスがパウロの二の腕になる

40節。「パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みに委ねられて出発した。」シラスとは、あのシラスです。エルサレムの教会から送り出されてアンティオキア教会の人たちを力づけた人。一度はエルサレムに帰りましたが、パウロはシラスに手紙を書き送り、一緒に伝道しようと呼びかけたようです。それでシラスはパウロの二の腕となって働くこととなります。その働きぶりについては、パウロが書いた手紙で何度か紹介されていますから、かなり信頼できるパートナーであったようです。

2) 問題が恵みに変えられていく

そうしますとこんなことが言えるのではないのでしょうか。もし、アンティオキア教会で異邦人の割礼問題が起きなかったとしたら、シラスはパウロと知り合うこともなければ、アンティオキア教会の兄弟たちとも知り合いになることはなかったでしょう。あのとき、割礼問題が起きたので、シラスがペテロの同労者として選ばれた。そう考えることができる。

まだあります。パウロとバルナバの二人の間に激しい議論が起きて別行動をとりましょうということになりました。その結果、エルサレムからシラスがわざわざ呼び出されて異邦人伝道の重要な担い手となっていきます。

3) 重荷を負わせない

人の目には、教会の中で次から次へと問題が起きていくように見えました。でも、その中で神がきちんと働いておられ、シラスが伝道者となっていく準備をしていた。そういうことが見えてきます。だから私たちはこだわるのです。たとえどんな問題が起きたとしても、教会は主の教会である。

エルサレム教会は手紙の中で書き送りました。「聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。」

このような結論に導いてくださったのは聖霊です。人が救われるのに何か条件が必要なのか。いいえ必要ない。なんの重荷を負うこともない。いや、主イエスの前であなたがたは重荷を下ろすことができる、と語って下さいました。このことばは割礼のことだけではなく、ほかのことにも言えるでしょう。

私たちは、ときには試練にあうことがあります。それはいつとき重荷にしか見えないかも知れません。アンティオキア教会にとって異邦人の割礼問題が起きたとき、パウロとバルナバの激しく対立したとき。どうしたらよいのかと悩んだ。ある人たちには重荷と感じたかも知れない。でも後になってわかった。神はいつまでも重荷を背負わせる方ではない。神は不思議な方法で重荷と思われたことを恵みに変えてくださった。これが神の教会の歩みだと教えてくれる。

このように教会を愛して下さる主ですから、なおさら私たちひとりひとりのことをどれほどに心配して下さいなのか。どんなときでも、主の助けが必ずあることを信じて歩んでまいります。